2008年度 地理学野外調査実習 報告書

伊勢 河崎

大阪市立大学文学部 地理学教室

＜目　次＞

はしがき　(2)

Ⅰ　業種の変化による町並みの変化

酒井 宇紀・迫田 和佳子　(4)

Ⅱ　伊勢河崎のまちづくりの現状と課題

権田裕士・中山和哉　(14)

Ⅲ　伊勢河崎の食文化

石田　萌・米倉　数昌 (23)

編集後記　(36)

は し が き　－地域学としての「河崎学」の可能性を求めて－

本書は、大阪市立大学文学部地理学教室が提供する選択必修科目の一つである「地理学野外調査実習Ⅰ」（前期開講）、「地理学野外調査実習Ⅱ」（後期開講）において、2008 年度に実施された伊勢市河崎地区の実習調査報告である。

この「地理学野外調査実習」の趣旨は、現地調査の企画・実施、調査結果のとりまとめという一連の過程を通じて、地理学の研究にとって必要不可欠な手法を修得することにある。本年度の受講者は、2008 年 4 月に地理学コースに進学したばかりの２回生５名、ならびに３回生１名の計６名で、この授業を通じて本格的なフィールドワークを初めて経験することとなった。

4 月に河崎に関する DVD や地形図を題材にして調査地の概要を知るところから始まり、２名ずつ３班に分かれてテーマの決定と調査項目の選定、班別に詳細な調査スケジュールの作成を行い、8 月 6 ～ 9 日には河崎に赴き現地調査を行った。その後、10 月より調査結果の整理にとりかかり、12 月の研究成果の中間発表を経て、2 月中旬には最終レポートを提出することとなった。こうした一連のプロセスは、受講生に少なからぬ努力を要求するものであり、レポートの締切り直前には、学年末の定期試験の合間を縫って、研究室で長時間にわたって作業を行ったグループもあった。学術的にはまだまだ未熟な部分が散見されるレポートではあるが、自分たちが調査した内容を第三者に読んでもらえる形態でとりまとめたことには、授業担当者として敬意を表したい。

さて、河崎での実習調査も 2007 年度に引き続き２年目を迎えた。今回の調査のうち、「町並みの変化」や「まちづくり」は昨年度も取り上げられたテーマである。このように、「受講生のメンバーが毎年交替していくにもかかわらず、同じ場所で複数年にわたって現地調査を行うのはなぜか？」という問いにも、この機会にあわせて答えておきたい。改めて言うまでもないが、現地調査の準備から報告書の作成に至る過程で、受講生には様々な資料の収集と整理が求められる。その過程を通じて、受講生は河崎の地域資源に対する共通理解を深めながら、新たな知見を見いだして行く。したがって、調査内容については、前回の報告書からヒントを得たり、昨年の成果を踏まえつつ、それをさらに掘り下げたものであって、各章には受講生の思いが込められている。

具体的には、第Ⅰ章では交通手段の移りかわりとともに、かつては機能分担を通じて一種の支配・従属関係にあった「本河崎」（勢田川左岸）と「向河崎」（同右岸）の関係性も変化していくプロセスが取り上げられた。また、まちづくりをめぐる地元の人々の多様な意見が検討されたり（第Ⅱ章）、さらには食文化

に関わる調査の中で、「伊勢春慶」のように次年度にもつながる調査対象にめぐり会ったグループもあった(第Ⅲ章)。

担当者は、昨年の３月に開催された『新・蔵くら談義Ⅵ』に招かれ、2007年度の調査について、河崎の皆さんの前で報告させていただく機会にめぐまれた。その折に、実は上記と同様の試みが「蔵くら談義(全体ワークショップ)」という形で、地元でも以前から取り組まれていることを知った。船溜の復元や蔵の活用(用途転用)のみならず、このような地道な取り組みを通じて「場所の記憶」は後世へと継承されて行くのであろう。

今回の調査に際しては、前年度に引き続き、現地見学やインタビューなどを通じて地元河崎はもとより、伊勢市内の多くの方々にお世話になった。とりわけ、インタビュー日程の調整をはじめとして、私たちを快く受け入れ、多大なご協力をいただいた NPO 法人・伊勢河崎まちづくり衆の高橋徹理事長、伊勢河崎商人館の西城利夫さん、西山清美さんには心より御礼申し上げたい。

河崎を愛する人々にとって、この報告書が多少なりとも役に立つことがあれば、実習参加者一同にとって望外の喜びである。

2009 年 3 月

「地理学野外調査実習」授業担当者
大阪市立大学大学院 文学研究科 地理学教室
教授　大場 茂明

Ⅰ．業種の変化による町並みの変化

酒井 宇紀・迫田 和佳子

１．はじめに
(1) 河崎における街並みの変化
(2) 本河崎と向河崎の関係
２．残った業種・なくなった業種
(1)河崎の現状
a)廃業した業種
b)移転した業種
(2)廃業・移転の理由
a)船輸送の廃止
b)輸送形態の変化
c)護岸工事による立ち退き
d)需要の減少
e)高齢化、後継者不足
(3)今後の河崎について
３．本河崎と向河崎の関係性
(1)町の分け方の概要
(2)本河崎―向河崎
a)それぞれの町の概要
b)住民の意識
c)戦前の本河崎―向河崎の関係性
d)戦後の本河崎―向河崎の関係性
４．まとめ

１．はじめに

(1) 河崎における街並みの変化

河崎は、かつて勢田川を利用した水運によって「伊勢の台所」と呼ばれ、問屋街として発展していた町である。しかし、時代の流れの中で多くの店が、職種を変え、また河崎の町から出ていった。問屋街として栄えた河崎の町も、運搬手段が水運から電車、そして自動車へと変わっていったことや、流通業の変化の中で卸売りという機能が縮小されたことなどにより、街そのものの在り方から変わっていかざるを得なかったといえる。河崎の町は、かつての活気を失い、もはや「伊勢の台所」と呼ばれたころの勢いは見られない。し

かし、河崎特有の切妻作り・妻入りの建築物や蔵、街に数多く残る世古(路地)などがつくりだす町並みは、近年その価値が再認識される傾向にあり、新たにサービス業などの業種が相次いで進出することによって、残されていこうとしている。

そこで、こういった時代の変化の中で地区から無くなっていった業種と残った業種について調べることを通じて、産業の変遷にともなって町並みがどのように変わっていったかを考えていきたいと思う。分析にあたっては、河崎でのフィールドワークで行った住民の方へのインタビューと昭和期と現在の地図をもとに、現在と過去の河崎について比較し、町並みの変化をとらえていくといった方法をとった。

(2) 本河崎と向河崎の関係

また本章では、同じ「河崎」という名称を持つ「本河崎」と「向河崎」との関係性についてもあわせて扱いたいと思う。「本河崎」、「向河崎」とは地区の通称であり、本河崎は河崎 2 丁目のあたり、向河崎は河崎 3 丁目を指す。二つの地区は、勢田川を挟んで、その両岸に向かい合ってある。しかし、こうした近接する土地であるにもかかわらず、二つの地区にはそれぞれ特徴がある。かつて、本河崎―向河崎は、問屋街である本河崎と、そこに物資・人材を送る職人街的な要素を持つ向河崎といった支配＝従属関係にあった。しかし、問屋街としての機能を本河崎が果たさなくなった現在において、その関係性も変化しているであろう。その変化についても、町の方からのインタビューなどを参考に考えていきたいと思う。

２．廃業・移転した業種

河崎における産業構造・商業形態の変化を考えるに当たって調査したのが、河崎に店を構える業種の変化である。どのような種類の店舗が廃業したり、移転したりしてなくなったのか、どのような種類の店舗が現在でも残っているのか。それを、昭和 30 年頃と現在とを比較して考察してみた。

(1) 河崎の現状

表１　昭和 30 年代～現在に移転・廃業した店舗数

廃業（別業種に変更）	移転	現存	不明	計
94（12）	29	25	34	182

表１は、昭和 30 年頃に河崎に存在した店舗が、現在の河崎でどのように変化しているのかを示したものである。昭和 30 年頃に 182 軒存在した店舗の内、94 軒が廃業に追い込まれている。その内 12 軒に関しては、店舗そのものは残っているものの、別の業者によって取って代わられている。また、業者自体は引き続き存在しているが、河崎地区外へ移転して事業を続けているという店は、29 軒にも上った。現在河崎で昭和 30 年代からずっと営業を続けている店舗は、わずか 25 軒に過ぎず、全体の実に 8 割以上の店舗がこの間に消滅していったことがわかる。

a）廃業した業種

表２　廃業した店舗の業種別内訳

業　種	廃業した店舗数	昭和期の店舗数	廃業率
食料品小売販売、卸売、製造	40	58	69 %
雑貨・衣料品小売販売、卸売	31	47	66 %
医療、サービス	9	18	50 %
飲食品店	2	6	33 %
機械、製造業、その他	12	53	23 %
計	**94**	**182**	**52%**

表 2 は、昭和 30 年代～現在に廃業した店舗に関して、業種別に分析したものである。まず食料品関係であるが、58 店舗中の 40 店舗がなくなっており、実に 7 割近くが姿を消している。特に菓子類販売業や生鮮食品販売業に関しては、その殆どが廃業に追いやられている。元々河崎は問屋街であって生鮮食品の販売は少なかったので、ほぼ全滅といって良い。味噌醤油製造や鰹節問屋など一部営業している店舗もあるが、いずれもかつてのような賑わいは失われている。

同様に、衣料品に関しても全体の 3 分の 2 が廃業しており、履物屋や呉服屋など一部の店舗は細々と残っているが、全体的に廃業の割合が大きい。

サービス業に関しては、銭湯の廃業が目立つ。かつては各町単位で銭湯が存在していたが、内風呂の普及や人口減少による需要の低下のためか、一軒を残して全て廃業してしまった。また個人経営の小さな医院も、その多くがなくなっている。このように、卸売業・小売業・サービス業については、本河崎を中心に、その大部分が廃業に追い込まれてしまっている。

その一方で、機械類を取り扱った店舗や材木屋など、製造業関連は殆ど廃業していない。というのも、これらの業種の殆どが向河崎に存在しており、本河崎での問屋・小売業の衰退現象とは性格が異なるためだと思われる。これは次の項で説明する。

b）移転した業種

表３　移転した店舗の業種別内訳

業　種	移転した店舗数	昭和期の店舗数	移転率
食料品小売販売、卸売、製造	9	58	16%
雑貨・衣料品小売販売、卸売	6	47	13%
医療、サービス	0	18	0%
飲食品店	2	6	33%
機械、製造業、その他	12	53	23%
計	**29**	**182**	**16 %**

表３は、移転した業種についての内訳を示したものである。食料品関係で目立つ移転業種は、鮮魚・水産関係である。後述する魚市場の船江地区への移転によって、魚問屋や小売業者の多くが魚市場の跡を追って次々と移転していってしまっている。また、酒問屋など、物資の保管に大量のスペースを必要とする事業も、広い土地を求めて河崎を出て行ってしまった。

機械関係や製造業は廃業の割合が少ない分、移転が目立つ。これは向河崎側の護岸工事によって立ち退きをした店舗が多いことが理由の一つに挙げられる。加えて、機械類や製造業の店舗は、原料・製品の輸送に際して広い道路が、また製品等の保管のために広い土地が必要なため、そのような用地を求めて移転するケースが多い。

医療・サービス業は、他の地域に移転することなく、そのまま廃業してしまうケースが多いようである。

(2) 廃業、移転の理由

上記にみられるような店舗の廃業や移転問題には、いくつかの原因が挙げられる。どれか一つが最大の原因と言うわけではなく、様々な要因が重なって昨今の河崎の衰退を招いているというのが現状だ。この項では、その主な原因を挙げていく。

a) 船輸送の廃止

写真１　勢田川左岸（本河崎側）に復元された船溜
（2008 年８月６日撮影）

かつての河崎の流通は船輸送が中心であり、勢田川の水運を利用して、三河地方や鳥羽地方から物資の輸送を行っていた。しかし、第二次大戦後間もない時期に、勢田川に相次いで橋がかけられたことにより、それまでのように魚やその他の食料品・雑貨を船で直接

運び入れることが困難となった。そのため、魚市場は河崎から撤退し、広い土地のある船江に移転することとなる。このことと連動して、魚屋や生鮮食品小売業も、同じく船江に移転をする。また、河崎には三河地方や鳥羽地方からやってきた水夫をもてなすための旅館や観光施設、みやげ物屋などもあったのだが、船輸送の衰退によって悉く廃業している。

b）輸送形態の変化

a)に関係して、河崎と地区外との交通手段は船による輸送から鉄道輸送、自動車輸送へと変化していったことも、店舗廃業・移転の原因に挙げられる。鉄道輸送によって物資を駅から運び入れる必要が出てきたのだが、河崎では古い区画割りを持つ昔ながらの町並みがそのまま残っていた。そのために路地が狭く、輸送用のトラックが地区内に入ることが出来なかった。当初は志摩地方から出稼ぎにやってきた運送業者が人力で駅から運んでいたのだが、自動車輸送が本格的になってくると、酒問屋や畳屋、あるいは大規模な敷地を必要とする製造業などの業種は、八間道路沿いの広い土地へ移転することとなった。

c）護岸工事による立ち退き

1974(昭和 49)年、伊勢地方は七夕洪水に見舞われる。その被害により、勢田川の護岸が改修されることとなった。その際に、向河崎の北側(字名)地区に住んでいた住民は立ち退きを迫られた。立ち退きをした人たちの殆どが製造問屋であり、船江や八間道路沿いの遠隔地へと事業を移転していった。

d）需要の減少

近年の変化として、鉄道や自動車の発達により、観光客がより遠方の商業地に足を運びやすくなったことが挙げられる。たとえば、同じ伊勢市内にある「おかげ横丁」（内宮前）などは、商業地域として河崎以上に賑わっている。

また、伊勢自体の景気の冷え込みや、河崎へのアクセスの悪さなどから、客足が途絶えてしまった側面もある。特に、サービス業や飲食店は、その多くが廃業・移転することとなった。あわせて、第二次大戦後の生活様式の変化にともなって、薪炭販売業や銭湯は必要とされなくなり、廃業していった。

e）後継者不足

河崎でも、全国各地の地方都市と同じく、若い世代の人口流出が著しい。そのため、後継者候補が少なく、河崎で事業に関わる業者の高齢化が進んでいる。現在の店主が年を取り引退するとともに、店自体も廃業するというケースが多い。

これらの要因によって、河崎の商業は衰退していったと考えられている。

(3) 今後の河崎について

これまで、如何にして河崎の町が衰退していったのかを考察してきたが、当の河崎の住民達は今後どのように河崎が変わっていくと考えているか、インタビューしてみた。やはり多かったのが「今後も衰退は続いていくだろう」という意見であった。その理由として、

前掲 e)の跡継ぎ問題を挙げる人が多く、「人口も減少傾向にある河崎の町が、今後商業的に盛り上がっていくとは考えにくい」という意見が多かった。特に卸問屋は、「外国の安い製品が日本に大量に入って来る現在、昔ながらの経営手法を続ける河崎では厳しい」と語られている。

一方、明るい話題としては、サービス業、観光業の発展が挙げられる。近年、河崎には他地域から喫茶店や美容院などが新たに参入してきており、これらの店舗が増えることが河崎の活性化に繋がるのではないかと期待されている。観光業についても、NPO 法人伊勢河崎まちづくり衆を中心に PR 活動を行っており、「河崎の伝統的な町並みを利用して観光客を呼び込むことが出来れば、観光を中心とした町づくりが出来るのではないか」という意見もある。また、(1)で小売業や小規模な医療施設が廃業していると述べたが、河崎の近くにはスーパー・マーケットや大きな病院がいくつもあり、商業活動は確かに以前と比べれば衰退したものの、実際に生活する分には寧ろ住みやすい町であると評価されている。

３．本河崎と向河崎

(1) 町の分け方

河崎の町はもともと、「五ヶ町」、「南町」、「南側」と 3 つに分かれていた。それが「南町」から「旭通」が独立し、「南町」の一部と「五ヶ町」が合併し「六ヶ町」となり、現在では本河崎には「六ヶ町」と「旭通」という二つの区分があり、向河崎は「南側」として認識されることとなっている。この区分は、伊勢地方における一大行事である伊勢神宮の「御木曳」の場において、それぞれの町単位で木曳きをするといったように、今でも重要な意味を持つものである（写真２）。

写真２　河崎南側の木曳きの模型（向河崎在住　中津さんの家にあったもの）

(2) 本河崎―向河崎

a) 両地区の概要

本河崎は、河崎の町の中心になる地区である。河崎本通りといった主要街路も本河崎にある。勢田川という天然の運河を利用した水運により、かつてはさまざまな物資が運び込まれる問屋街として発展し、江戸時代から昭和の中頃まで伊勢の台所として経済の中心にあった。しかし、輸送手段がトラックなどの陸上交通中心に変化するにしたがい、魚市場が船江へと移転するなどした結果、かつての問屋街として旦那衆の下で繁栄していた頃からは著しく衰退している（写真３）。

写真３　現在の本河崎（河崎商人館所蔵）

また、向河崎は、昔から本河崎に人材や物資を提供してきた職人街といった色合いが強い地区である。ここでは、畳や表具製造などが盛んに行われていた。1974(昭和 49)年の七夕水害の後に、勢田川の河川改修工事がなされ、町並みは大きく変化した。かつては、川に沿うように家が並んでおり、現在の勢田川の真ん中あたりまで家があった。河川改修の際に、家並み一筋分が除却された。また、現在は川に沿って車の通る広い道路があるが、かつては大八車一台が通れるほどの幅しかない道が家々の間を通っていた（写真４，５）。

写真４　河川改修以前の向河崎（河崎商人館所蔵）

写真５　河川改修後・現在の向河崎（河崎商人館所蔵）

b）住民の意識

では、本河崎の住民と向河崎の住民との間では、こうした河崎の町を分けて考えるほどに双方の地域差は意識されていたのだろうか。

写真６　「河崎げんき会」の皆さんへのインタビュー風景
（2008 年８月８日；於・河崎商人館）

今回、二つの地区のそれぞれに住む方にインタビューすることが出来た。その印象としては、やはり本河崎は旦那衆がいるといったことで、かつては経済的にも、町の繁栄の度合いとしても、本河崎が河崎の中心となっていたという意識があったと考えられる。この意識は、どちらの地区でもみられることである。現在では、河崎の町自体の衰退により、本河崎と向河崎の間の差異が小さくなったことからも、向河崎の住民には本河崎に対する対抗意識のようなものが存在しているともいえるようであった。

c）戦前の本河崎―向河崎の関係性

ここからは、本河崎と向河崎の関係性を考えていこうと思う。その間にも変化はあったであろうが、大きく第二次大戦前と戦後という枠組みでとらえていく。

戦前の二つの地区は、旦那衆のいる本河崎とそこに物資（原材料など）を送る、もしくは働きに出る人材を送る向河崎といった支配・従属関係にあったと考えられる。つまり、本河崎あっての向河崎というつながりがあったと考えられるだろう。本河崎が中心であったということは、戦前に向河崎の人間がお祭りなどの際に、本河崎の通りを仮装して練り歩き、本河崎の旦那衆から羽振りよく振舞われていたといった話からもうかがえる。

d）戦後の本河崎―向河崎の関係性

次に第二次大戦後の関係性であるが、本河崎が輸送手段の変化などによって問屋街としての機能を失い衰退していった一方、向河崎も勢田川の改修工事の影響や、本河崎の衰退と相まって、ともに衰退へと向かっていった。向河崎においては、特に河川改修工事の影響が大きかったと考えられ、この工事によって一番川沿いにあった家並み（写真３）が立ち退きになり失われた。また、残った家もその多くが変わってしまった。このため、職人が辞めてしまうなどした。

こうした変化は、河崎の町全体にいえることであり、かつての商工業地帯から、共に日常生活のための店は残ったが、かつてのように本河崎が問屋街、向河崎が職人街といった違いは目立たなくなり、普通の住宅地になったと言える。ただ、本河崎のほうでは現在、「伊勢河崎まちづくり衆」などを中心に、外部から新たな業種を呼びこむなどしながら、

昔ながらの町並みを生かした街づくりをしており、昔とは違った形でではあるが再生への道を進んでいるのではないだろうか。しかし、本河崎と向河崎の関係性に昔のような明確な差異がなくなったことも含めて、「本河崎を中心として、それを向河崎が支える」といった形で河崎の町が発展するといった方向には今後は向かわないと考えられる。物資や人材の流通がなくなったことからも、かつてほどの結びつきが二つの地区の間にはなくなっているといったことがいえるだろう。

４．まとめ

河崎は古い歴史を持った町である。それゆえに、長い年月を経て、変化したことも多くある。河崎の町は全体として、やはり衰退していっていると考えられるだろう。そのなかで、本河崎と向河崎といった異なる特色を持った地区間の関係性にも変化がみられた。これは、単に繋がりが薄くなったという事ではなく、二つの地区に大きな差がなくなったことによって、一つの枠組みで捉えやすくなったと考えることも出来るのではないだろうか。

【参考文献・Web サイト】

・松田豊幹（1893）:『三重県下商工人名録　全』三重日報社
・宇治山田商工会議所（1931）:『商工人名録』
・伊勢文化舎（2002）:「伊勢・河崎のれん物語」,『伊勢人』No.130
・『伊勢のだいどこ　伊勢河崎商人館・勢多川ウォーキングロード』
http://www.ise-cvr.ne.jp/machi/road/kawa.htm
・『伊勢河崎商人館』　http://www.e-net.or.jp/user/machisyu/

Ⅱ．伊勢河崎のまちづくりの現状と課題

権田裕士・中山和哉

１．はじめに
２．伊勢河崎まちづくりの経緯
３．まちづくりにおける問題点
　(1) 若者不足
　(2) 進む高齢化
　(3) 住民の無関心
　(4) 駐車場不足
４．まちづくりに携わる人々の考え
　(1) 若者の河崎への定住意識
　(2) 町並みを残すことについて
　　a)建物の保存について
　　b)蔵の再利用について
　(3) まちづくりへの参加
　(4) 伊勢河崎まちづくり衆の活動について
　(5) これからのまちづくりへのあり方
５．おわりに

１．はじめに

三重県伊勢市河崎町は、古くからお伊勢参りの人々の宿泊地として栄えていた山田のまちを支える台所の役割を果たし、江戸時代には巨大な問屋街として栄えた。そのため、河崎には伊勢湾からやって来た物資を勢田川から運び、保管できるように勢田川沿いにたくさんの蔵が建てられた。町の機能の変化や道路交通の発達とともに、現在では河崎は問屋街としての機能は果たさなくなったが、今でも現存する蔵を見ることができる（以上、NPO 伊勢河崎まちづくり衆, 2007)。そして、それらの町並みを利用したまちづくりや、河崎独自の街づくりが行われている。しかし、まちづくりには人手不足や、住民の意識の差など様々な問題もある。本章では、地元の人々に対するインタビュー調査や資料などを通して、上記のような河崎のまちづくり運動の現状と課題について明らかにしようと試みた。

２．伊勢河崎まちづくりの経緯

1974(昭和 49)年 7 月 7 日に伊勢地方を襲った七夕水害と呼ばれる水害の後、建設省(当時)が発表した勢田川改修工事計画は、蔵や切妻造妻入の町屋の景観を大きく変容させるも

のであった（日本建築学会，2004）。この改修問題が発端となり、まちづくり運動や河崎の町並み保存の運動が始まった。その後一度活動の停滞期を迎えるが、1997（平成 9）年の伊勢河崎マスタープランの策定により伊勢河崎の町並みが高く評価され、まちづくりは再び活気付いた。1999（平成 11）年には河崎のまちづくり団体を結集する形で「NPO 法人　河崎まちづくり衆」が設立され、2002（平成 14）年に河崎商人館が開館した。現在では、「伊勢河崎商人館」を活動の拠点とし、まちづくり衆が主な活動の担い手となっている。

３．河崎のまちづくりにおける問題点

(1) 河崎における若者の不足

「河崎は衰退の地域だから働き口も少なくて、若い人は帰ってこない。昔の河崎は卸業で栄えたが、今は交通手段も代わり、河崎では商売しにくい。大きな車が通ることが出来ず、商売をする人は外に出て行くしかない。上手くやっているところは、外に出ていくし、小さい所は潰してしまう。」（E さん）

「子供が２人いるがどちらも、地元から離れた所に就職してしまっている。勤めるところが無く、大学に行ったら帰ってこない。」（Ma さん）

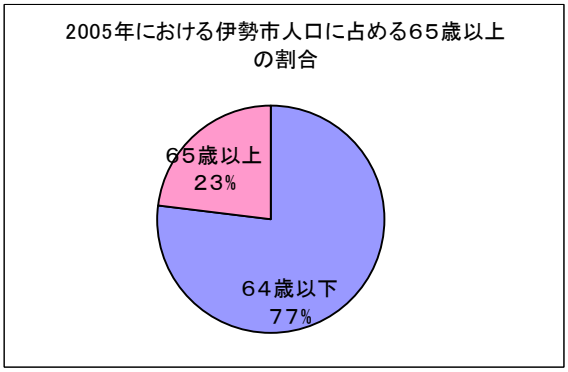
「昔は学校も一学年４クラスくらいあったが、今では子供も減ってきている。子供会も形骸化している。」（I さん）

かつて河崎の町は、水運を中心に問屋街として栄えた。その頃には、家業を継ぐ若者や、問屋の使用人、若い頃外に出て行ったとしても河崎に戻ってくる若者が多く存在した。しかし、水上輸送から陸上輸送の変化に伴い、河崎の狭い道には大きな車が入ってくることは困難であったため、河崎で商売をしていた人達は地区外へと出て行き、河崎自体は問屋街として衰退していった。その結果、河崎での働き口も減り、進学や就職などにより外へ出て行った若者が戻ってくるという事も少なくなり、河崎の街の衰退はさらに進んでいる。若者の不足は、河崎のまちづくりの担い手も不足しているということでもあり、今後の活動に関わってくる。

(2) 進む高齢化

河崎ではどれくらいの高齢化が進んでいるか、次ページのグラフにまとめてみた。

左が平成 17 年の伊勢市全体における高齢化率であり、右が河崎における高齢化率である。このグラフを見てもわかるように河崎では 65 歳以上人口が 35%と、伊勢市全体（23%）より 12 ポイントも高齢化が進んでおり、人口に占めるお年寄りの数が多いことがわかる。また、同じ調査時点の全国の高齢化率は 20.1 %であり、河崎は、高齢化率が比較的高い伊勢市の中でも際立って高齢化率が高いまちだと言える。実際、河崎のまちづくりを行っている人の中にも、お年寄りの方は大勢いる。しかし、まちづくりの担い手が高齢者ばかりということは、河崎のまちづくりを進めていく上でネックとなる。活気あるまちづくりには、それを担う若い人の力が必要である。



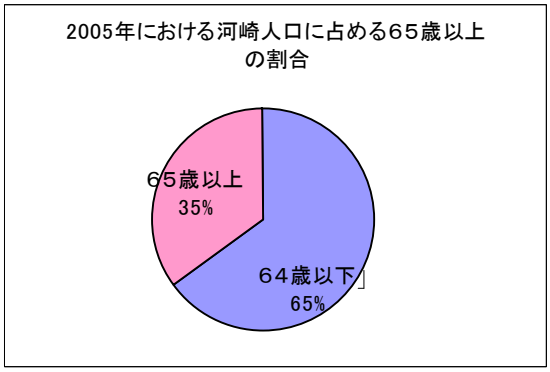


図　伊勢市および河崎地区における高齢化率(2005 年)
(参考資料　平成 17 年度国勢調査)

(3) 住民の無関心

「町が住むこと中心で、外から来た人に『静かな町として建物を買ったのに、騒がしくしないで欲しい』と言われたこともある。昔から住んでいる自分たちは、『賑やかで元気な町』であるという認識だが、新しく外から入ってきた人にとっては、『駅から近くて静かな町』という認識になっている。」　(Mu さん)

「今は、周りの人とのつながりが昔より弱くなってきている気がする。『他人の所は他人のところ』となってしまっている。河崎の町並みに関しても、鉄筋の家に住んでいる人にとっては関心のないものとなっている気がする。」　(E さん)

河崎のまちづくりでは、地元に住む人たちが協力し合い、進めて行くことが重要である。しかし、住民の中には、「まちづくりは自分とは関係のないもの」、「静かに暮らしたい」、「騒がしくしないで欲しい」と考える住民もいるようである。外から入って来た人にとってみると、河崎は駅からも近く、伊勢市の中心街からもそれほど離れていないため、非常に住みやすい場所である。住むことを目的に入ってきた住民にとっては、まちづくりが興味の薄いものである可能性は高い。また、河崎のまちづくりには直接的利害が絡まないために、多くの人にとって「自分とは関係のないもの」と捉えられ、このことが住民のまちづくりへの意識の低さを招いている。これらの住民が今後まちづくりにどう関わっていくかに、河崎のまちづくりの将来は大きく左右されるであろう。

(4)駐車場不足

河崎の町には駐車場が不足している。もともと勢田川の水運による交通が発達しており、道路は狭く、建物も密集していた。現在でも空き地になったところ(除却された建物の跡地)に駐車場を設けているが、車を駐車するスペースが足りない現状である。そのため、住んでいる人にとっても、また河崎へ自動車で来る観光客にとっても不便であるという意見が多く聞かれた。それがまた、若者離れの要因にもなっていると考えられる。

４．まちづくりに携わる人々の考え

(1) 河崎への定住意識

「今ここらへんにお住まいの方は、もともとここを持っていて、ここで問屋をしていた方だから、当然お年を召してきている。その息子さんたちは、仕事がないからよそに行こうと思って、よそで仕事をしに行ったら、こっちには仕事が無いのにわざわざ戻ってこない。例えば、向こうで家を買ってしまうとか、そういう人が多いね。」　（Mu さん）

「都心部の大学なんか行っちゃたら、もう帰りたくないだろう。興味のあるなしの度合いが田舎と都会で違う。田舎に帰っても、就職しようと思ったら家の跡継ぎじゃない限りは、銀行とか先生とか公務員とか就職口がない。河崎なんていったら、衰退のそこの方までいってしまった。」　（E さん）

「昔は問屋さんがあったから人がたくさん働いていたが、最近はないですね。」　（I さん）

「今はほとんどベッドタウンになっている。寝にくるだけ。町に住む利害を考えると、利がほとんどない。『私は私のところでいいや』って、寝にくるだけ。この近所には、そういう人が結構いる。祭りやそういうことに参加しない。」　（O さん）

「通っている中学校に河崎の子は少ないです。クラスには２～３人くらい。」
（K さん，中学生）

若者の河崎への定住意識を調べるために、河崎に住む女子中学生二人に対してインタビューを行った。「河崎に住む生徒は、クラスに 2 ～ 3 人いるぐらい」と言うように、河崎に住む子供の人数も少ないことが分かる。河崎は駅やスーパー、遊び場等が近くにあり、かつそれほど田舎でもないため、子供にとっては何ひとつ不満のない町だと考えることができ、彼女たちも「河崎は好き」、「将来も住みたい町」と答えた。しかし、彼女たちが生産年齢になっていくと話は別である。「昔は問屋で多くの人が勤めていが、今は働き口がない」というように、河崎では職住近接が崩れてしまった。それにより、若者は都市部の大学に行くとそこで就職先を見つけ、河崎には帰ってこないのである。したがって、若者の定住意識は必ずしも低くはないが、生産年齢になると河崎に住みたくても他に出て行かざるを得ないのが現状だと言える。

(2) 町並みを残すことについて

a) 建物の保存について

「利便性を考えれば、今の家の方が住みやすいわ。今のこういう家なんて、すごい住みにくいやんか。僕なんかよく言っているのが、まちづくりで町並みをどうのこうのって方がたくさんみえたんやけど、持ち主から見たらすごく不便。第三者が良いねと言うことはよく聞くけど、じゃあ住んでみなよって話やんか。

少々お金を持ってる方は建っていても直していくし、使わんでも直していけるだけの財があれば直していくし、残せへん方やと壊さざるを得ないよね。あると経費かかっちゃう

し、使っていれば別の話やけど。古い家には不便さがあるし、だって江戸時代に建てた家は、その状況の江戸時代に一番合った家を建てる。それが今の時代に合うかといったら、合うわけがないんだよね。」（E さん）

「住んでみえる方からみたら、新しい家に住みたいと思うよ。私らでも新しい家に住みたいと思うもん。ただ今壊してしまったら、次は同じものは作れないからね。

住んでる者が町をつくるのと、住んでない者が町をつくるのは、ずいぶん町が違ってですね、私なんかは壊すのがもったいないからやり始めただけの話なんだけどさ。」

（Mu さん）

「景観といっても例えば、確かに景観が良いのは言うことないだろうけど、でも一般の人たちに対して、古い家にしとしてくださいとか、新しく家建てる場合でもこういう風にして下さいとか、そういうことを言っていいのかと。やっぱりそれは問題あるだろうと。それよりは、まず何よりも住民の意識を変えることによってね、住民も例えば新しく家建てるんだったら、この町に合うようなこんな風にしたいねとか、そういう発想になってもらえば良いじゃないか。頭からこんなの駄目みたいな感じでやっちゃったら、ますます住民との溝が出来てしまうだろう。」（O さん）

河崎のまちづくりについては、「町並み保存は重要だ」という意見が多かった。しかし、一方では「歴史的建築物を壊して新しい家を建てることは致し方ない」と考えているようである。その理由として「お金があれば古い家でも残せるが、お金がなければ残せない。昔の家は現在の状況にあっていない」、「住んでいる人は新しい家に住みたいと思う。住んでいる人が町をつくるのと、住んでいない人が町をつくるのでは大きく違う」、「利便性を考えれば昔の家は住みにくい。第三者が良いとは言うけど、持ち主からしたらすごく不便」という意見が挙がり、新しい家を建てることを黙認せざるを得ない状況だ。現在河崎には、行政による景観条例が存在しない。商売主体の「おはらい町」（内宮前）とは違い、河崎は生活主体のまちであり、目的意識があいまいなためである。その点について、「町並み保存を上から押し付けるのではなく、住民自ら保存しようと思うようになることが必要だ」いう意見は、これからのまちづくりの鍵になるのではないかと思う。

b）蔵の再利用について

「まちづくりの運動の流れもあるし、慣れ親しんだというか、自分も小さい時から住んでたんで、潰さずに残してある。」（E さん）

「やっぱり河崎の水辺に映った町っていうのと、木の温もりの温かみが良い。

歴史的景観は、残せるものは残したら良いし、やっぱりあまり無理をして残そうと思うと、無理が出てくるだろうと思うから、それはそのときその時だよね。うちなんかは、ずいぶん変わってってはいます。生活するために必要なことはどうしても変わっていきますから、その時代時代に合うようにある程度は変えなければしょうがない。ただ、昔の人の知恵というのは非常に徳の高いものがあって、私たちもここで何でお商売していたかなっ

ていうのは、この辺が昔七夕豪雨っていって伊勢市が全部浸かったことがあって、ここら辺だけは残ってました。ということは、先人の徳があって『この辺はそういう水難とか色んな事に大丈夫だよ』ということを教えてくれたりする。だから、そういうものは大事にしないといけないと思う。

町おこしをするために私たちは再利用しようと思ったのではなくて、私自身は、うちの家は『自分の資産を守る為にどうしたらいいの』って考えた時に、『経営をしていきましょう』となった。それが 10 年ぐらい経って、町おこしが色んなところで盛んになってきたことと、たまたま繋がった。

『誰かがやっていかなければ、本当に朽ち果ててしまう』と思うから、私の最大の理想は、今後はそれを町内会の方とか資産を持った方々が少しずつお金を出し合って協同組合みたいにしていって、この町を管理していただくグループが出来ていくと一番いいかなっていう風に呼びかけをしたいなと思っています。それで、(歴史的な建物を)買い上げていく、借りたい人に貸してあげるっていうのは今考えていますね。そういうことしていると、今は結構、国とか県とか色んなところから支援金が下りたりするので、助成金も考えながらやったらいいと思う。」 (Mu さん)

また、現在行われている蔵の再利用についてもお話を伺った。蔵を貸す側の人は、基本的には「自分が慣れ親しんだものなので、潰さずに残してある」、「川辺に映る町並みがいい」、「昔のものは大事にしていきたい」と考えているが、「蔵を残すことはまちづくりのためにやったことではなく、自分の経営のためにやったことがたまたま、まちづくりにつながっていった」というように、古い家は使わなければ傷んでいくので、それならば人に貸して使ってもらおうという考えのようだ。しかし、建物はあるだけでも維持費がかかるため、家賃をもらってもあまり利益は出ず、資産のある人しか貸し出すことはできないようだ。しかし、「理想は資産のある人が共同で出資し、河崎の建物を買い取り、借りたいという人に貸し出していきたい」(Mu さん)というような、貴重な意見も聞くことができた。

(3) まちづくりへの参加

「昔から住んでいる人からしたら、河崎の町は当たり前。地元の人は、河崎に対して特別な意識はなくて当たり前。特に何もしなくて良い。普通に感じている。流れに任せる感じ。そこに住む人にとっては当たり前で、特に何かしようという感はない。外から来た人は非日常だから、河崎に興味を抱くかもしれない」 (E さん)

「団塊世代の人間はみんな他のところで働いて、定年後も帰って来ないことが多い。定年後の人も自分のやりたい趣味を行ったりして、まちづくりに参加しない人も多い。」 (Ma さん)

「昔はイベントなどを行うときに、おにぎりなんかを出したりしていた。しかし、それはしてくれる人がいたから。今はなかなかそういう人がいない。手伝ってくれる人はいるけど、自分からやろうっていう人はあまりいない。多くのひとが段取りとかもしないといけない。」 (I さん)

住民のまちづくり参加に関しては、一貫して「真剣にまちづくりをやろうって人は、自分が何かに関わっている人しかいない」という考えだった。「昔から住んでいる人からしたら、河崎の街は当たり前。地元の人は、そこに住む人にとっては当たり前で特に何かしようという感はない」という意見に見られるように、河崎はあくまでも生活主体の町だからである。「まちづくりは外の団体がやっていて、他のひとがまちづくりしてあげているから、住民が手伝って当たり前みたいになり」、住民はボランティアとしてお祭りなどを手伝う程度だが、自分から何かをしようという人は余りいないようだ。

「団塊世代が定年を迎えた後に、彼らの活躍に期待できはしないか」という質問も行ったが、「河崎には、団塊の世代の人はあまりいない」、「団塊世代の人は自分のやりたいことをやる人が多いと思う」（Ma さん）という答えのように、期待はできないようである。

(4) 伊勢河崎まちづくり衆の活動について

「商人館は指定管理団体であり、市から運営を委託されているから、市へ報告をしなければならない。その報告のためのイベントをやっているという気がしてならない。」（O さん）

「今まちづくりを中心になっている人で河崎に縁のない人が、まちづくりをやることに住んでいる人は抵抗を感じる。住んでいる人からしたら、自分たちは(まちづくりを)やらないといけないなと思うが、そういう人達から言われたら冷めてしまう。」（Mu さん）

「目的が同じならやるかもしれないが、そうでなければ(まちづくりは)難しい。生活主体の街なんて特に難しい。周りの人との協力があった昔とは違う。河崎でも真剣にまちづくりをやろうとしている人は、自分が何か関わっている人しかいない。商売ありきの街は、それでまとまろうとしたら協力できるが、普通の家の人で関わりのない人なら、なかなか参加しない。」（E さん）

上記のように、まちづくり衆に対して住民が様々な意見を持っていることが、インタビューを通して明らかになった。例えば、まちづくりを勧める NPO に対しては、「まちづくり衆は商人館の指定管理団体であり、市から運営を委託されており、市へ活動を報告しなければならない。その報告のためにイベントを行っている、という気がしてならない」という意見のように、まちづくりを仕事の一環として行っていると捉えている人もいた。また、「河崎に縁のない人たちがまちづくりを行うことに抵抗を感じている住民もいる」というように、住民との間に温度差・まちづくりへの理解不足があるように感じた。

他にまちづくりに関して多く聞かれた意見が、「まちづくりの目的がはっきりしない」ということだった。商売を主体としたまちづくり等では、住民達の意思も統一しやすく同じ方向に進んでいくことも行いやすいであろう。しかし、河崎のまちづくりのような、あくまで住民の人たちが住むことを前提とした生活主体のまちづくりでは、目的がはっきりとせず方向性も定まっていないということである。そのことが、住民の無関心や興味を持てないことに繋がっているのかも知れない。

(5) これからのまちづくりへのあり方

「建物は利用しないと朽ち果てていってしまう。自分のところで利用できれば良いが、能力もないので、一生懸命に商売をやってくれる人に貸すのがいいと思う。いやいや商売をやっても成功しないものである。」 (Mu さん)

「一個人としては、蔵や建物を利用したい。使っていないので痛みなども出てきてしまう。貸せる人はいいが、蔵が自分たちの生活圏内にあり、他の人が入って来ることになる場合は貸せないこともある。」 (E さん)

「河崎は人の顔の見える町である。見るものは少ないが、生活感があり、来ると安心する町である。そういった所は大事にしていきたい。」 (O さん)

河崎には、伝統的な建物や情緒ある建物がまだ数多く存在している。今回インタビューをした河崎で蔵や建物を所有する人の中には、「所有している蔵を活用したい」という意見がある一方、「所有しているが、自分では活用することが出来ない」という声もあった。せっかくあるのだから活用し、利用してもらうことで、建物にも存在価値が出てくる。またそれによって、まちづくりにおいて重要な河崎の町並み保存に繋がり、新たに外から人が入ってきて来ることもあるだろう。

他にも河崎に対しては、「生活感があり、来ると安心する町である」、「懐かしい気持ちになる町」という意見も多く聞かれ、「住民に愛されている町」であるという印象を受けた。そういった意見は、これからのまちづくりを考える上で、大きなヒントとなってくるのではないか。河崎は商売や観光客を呼ぶことを目的にしているわけではなく、生活に重きを置いて今の町を守っていくものである。しかし、生活主体のまちづくりとは何なのか。これからの河崎のまちづくりにおいて重要なのは、まちのあり方の構想をイメージしていきながら「具体性をもったまちづくり」を進めて行かなければならない。

写真　河崎まちづくりのインタビューの様子
(2008 年 8 月 8 日撮影)

５．おわりに

河崎のまちづくりは様々な課題や問題点を抱えている。生活主体の町でのまちづくりというのは本当に大変だと思う。しかし、河崎に住むみなさんの河崎のことを大切に思う気持ちや、町が好きである気持ちを今回の調査を通してとても感じることができた。そんな河崎をこれからも大事にしていき、住民やまちづくり衆の人々が、協力して河崎のこれからを考えていくことが、河崎のまちづくりにおいて大切なことだと思う。

【参考文献】

・ NPO 法人伊勢河崎まちづくり衆(2007):「伊勢・河崎まちあるき　2007 年版」(地図)

・ 日本建築学会(2004):『町並み保全型まちづくり　(まちづくり教科書第２巻)』, 丸善

Ⅲ．伊勢河崎の食文化

石田　　萌・米倉　数昌

１．はじめに
２．伊勢の台所・河崎
（1）「伊勢の台所」とは
（2）なぜ河崎に物資が集まるのか
（3）伊勢の食文化の特徴
（4）伝統食の紹介
３．河崎における食文化のいま
（1）流通手段の変化
（2）自然環境の変化
（3）人々の意識の変化
４．河崎における食文化の復興
（1）伊勢河崎ブランド
（2）伊勢のだいどこ市
（3）インタビュー調査店舗の工夫
（4）伊勢春慶
５．まとめ

１．はじめに

我々食文化班は、江戸時代より「伊勢の台所」と呼ばれていた伊勢河崎の食文化にスポットを当て、商業町として栄えた当時の河崎の様子や伊勢地方の中での役割、また交通手段の変化などによって衰退し、かつての賑わいをなくした河崎における食文化の現状を調査した。本章では、河崎における食文化について、「伊勢の台所」としてにぎわった江戸・明治時代と、衰退後そのように呼ばれることがなくなった現在とを対比しつつ、食文化にどのような変化が起きているのか、現状から浮かび上がる問題点を明らかにしていく。さらに、インタビュー調査などをもとに、どのような食文化復興の取り組みが行われているのか、また今後の河崎における食文化の展望についても考察していきたい。

しかしながら本章では、境界を明らかにすることのできない「食文化」をテーマにしているため、対象地域を伊勢河崎のみに限定することができない場合があり、「河崎を中心とした伊勢地方」に範囲を広げて調査を行っていることにあらかじめご了承いただきたい。

２．伊勢の台所・河崎

(1)「伊勢の台所」とは

「河崎商人」という言葉が現在でも残っているように、江戸より伊勢地方随一の商業町として栄えた河崎は、伊勢外宮の門前町として位置づけられていた山田町の一部であり、宇治山田地区に大量の生活物資を供給していた。地元の人々の生活はもとより、多数の参詣客を引き受ける町々への物資の供給地であるため大きく賑わいをみせ、全国各地の産物が集まることから、河崎は「伊勢の台所」と呼ばれていたそうである。多様で大量の食物が集まるだけでなく、河崎は勢田川の水運を利用し、伊勢神宮を核とした伊勢地方の経済の中心となっていた。

このように、河崎は商人の町として江戸時代、明治時代を通して大いに賑わったが、多様で多くの物資が集まり、「伊勢の台所」となり得た理由として、河崎の持つ特性がいくつかあげられる。

(2) なぜ河崎に物資が集まるのか

a）土地環境

河崎に物資、特にここでは各地の産物が集まる理由として、河崎を含んだ伊勢地方の地理的、気候的な土地環境の良さという前提があったことをあげたいと思う。まず、三重県全体の土地柄についてであるが、右の地形図(図１)を見ていただきたい。三重県は比較的気候が温暖であり、北から中南勢にかけて広がる伊勢平野では、一年中緑が絶えないといわれるほど豊かな畑作物がもたらされている。また、東側は伊勢湾・伊勢志摩のリアス式海岸・太平洋に続く広大な熊野灘に面しているため、豊富な海産物に恵まれている。さらに、鈴鹿山脈や大台山に代表される山々からは山の幸、その山々の間を流れる河川からとれる川の幸にも恵まれている。このように、三重県は自然の恩恵を受けて豊かな食文化を育み、中でも貴重な海産物が豊富にとれることから、平安時代より都人から「御食国」とよばれていたという。また、政治経済的には、愛知・岐阜・滋賀・奈良・京都・和歌山に接しているため東国武士の文化が入り乱れて、食文化においても分水嶺の役割を担っていた。

図１　三重県の地形

（『三重県の地形・地盤』より引用）

このように、全体として豊かな産物に恵まれる三重県だが、伊勢地方に焦点を当てると、先ほども述べたように緑の豊かな伊勢平野に位置し、海産物が豊富な伊勢湾に面しているという非常に良い土地環境であることがわかる。また、自然環境の面では、伊勢神宮の存在もこの土地環境に影響していると考えられる。という

のは、伊勢神宮は神聖な場所として古くから土地が良好に保たれてきたため、伊勢神宮内の森林の土壌や川の水質に汚染が少なく、それは周辺にも影響を与える。汚染が少なければ、栄養の豊富な腐葉土ができるため、山菜や地上の生物は生息しやすい環境となり、また腐葉土から栄養が川や海に流れることによって多くの魚が集まるようになるのである。河崎についても、b)で述べる水運にも関係して 1896(明治 29)年には河崎に魚市場が設立されている（伊勢河崎まちづくり衆，2004）ように*、非常に多量の魚類に恵まれた土地であったことがうかがえる。

以上のように、河崎に多くの物資が集まる理由に、伊勢地方における土地環境が優れているため、豊富な産物に恵まれていたという点があげられる。

* この魚市場は 1967 年に河崎から船江へ移転している。

b）河崎の水運

写真１　現在の勢田川
（伊勢河崎商人館ホームページより引用）

次に、河崎に物資が集まる直接的な理由として欠かせないのは、勢田川を利用した水運である。勢田川は伊勢市南部の鼓ヶ岳に源を発する全長わずか７㎞の小河川だが、満潮時には水が伊勢湾から逆流して、満々と水をたたえ天然の運河となる感潮河川である。この満潮時を利用して、荷物を満載した舟が難なく川をさかのぼり、河崎へさまざまな生活物資を運んだという。

河崎が勢田川を利用した水運によって、本格的に商業の町としての機能を整えはじめたのは戦国時代末からであるが、河崎は伊勢神宮より海に近いところにあったため、海から来る参詣客の表玄関としての役割を果たし、宇治・山田の各門前町への物資の積み上げ港として機能していた。江戸時代に入り水運が発達すると、経済的中心地の面が見られるようになる。たとえば、門前町への米や魚の卸売権が河崎のみの特権とされ、また伊勢神宮への供物として、御園(村)とよばれる供物専用の米を作る田なども存在していたそうである。このように河崎は、水運を利用して様々な特権をもつようになり、伊勢地方における中心的な役割を果たすようになっていく。経済の中心地になればさらに物資は多く集まり、河崎が「伊勢の台所」として全国各地の産物を供給するほどに成長するのである。

このように、勢田川を中心とした生活を行う河崎では、水運が発達することで経済的な中心地として機能するようになり、大量の物資が集まるようになったのである。

c）伊勢神宮の参詣客

b)でも述べたように、河崎はおかげ参りのために海からやって来た参詣客が、伊勢神宮へと向かうために通る玄関口のような役割を果たしていた。おかげ参りでは膨大な数の参詣客が訪れるため、河崎では多くの食糧や生活物資を彼らに届けなくてはならなかった。そのためには大量の物資を運び込む必要があり、ここで水運が利用されたわけである。

別の見方をすると、参詣客に多くの食料や生活物資を供給するために河崎の水運が発達し、物資を大量に取り入れることができるようになったとも言えるであろう。水運が発達し、そして物資が河崎に集まることとなったのは、彼ら伊勢神宮の参詣客の存在が大きく影響しているであろう。

(3) 伊勢の食文化の特徴

ここでは、土地環境的に、また「伊勢の台所」として多様な食文化をもっている、河崎を中心とした伊勢地方の食文化の特徴に触れたい。

a) たまり文化

写真２　桶のたまり
（『ときの探訪』より引用）

伊勢においてよく特徴的にとらえられる食文化には、「たまり文化」というものがある。「たまり文化」はもともと東海三県に存在しており、濃厚な旨味と独特な香りを持つたまり醤油に代表される文化である（河村謙吾，2008）。たまり醤油は味噌づくりから生まれたもので、味噌製造の際に桶の底にたまった汁が「たまり」と呼ばれ、大豆の旨味が凝縮された味になる。このたまり醤油は、主に中部地方で製造されていたが、伊勢には三河地方から物資の行き来に伴って伝わったと言われている。今でこそ普通の醤油と区別されているが、三重では区別がなされていなかったというほど、なじみ深いものであった。たまり文化は、三重県においては伊勢うどんに代表される。

b) 生なり文化

また、日本文化の源流との一つと言える「生なり文化」も伊勢ではよく見られる。「生なり」とは「生まれたての自然なまま」という意味で、「生なり文化」とは自然や物の本質的な良さを引き出し、最大限に生かす文化のことをいう（三重畿央新都推進協議会，2003）。この文化は、ほとんど装飾のない伊勢神宮の建物に代表される文化である。伊勢や中でも河崎では、伊勢神宮に影響を受けやすく、また多くの参詣者に一度で大量の食糧を供給するため、手間のかからないファーストフード的な料理が好まれたという面もあり、「生なり文化」が特に広まっているのではないかと考えられる。

c) 伊勢神宮・おかげ参りに関する特徴

伊勢の街道においては、土地の生産物を生かした郷土料理が発達し、現在でも名物となっているものが多く存在するといえる。また、日持ちがよく手軽に持ち運びでき、おみやげとして参詣者に買ってもらえるような、お菓子類が多いという傾向があり、実際に現在でも茶屋が多くある。また、伊勢周辺では神饌（伊勢神宮にお供する食べ物）と、庶民の食べ物が存在するという伊勢ならではの文化もある。今回は、河崎を中心とした日常食の庶民の食べ物を調査し、神饌には触れていないのであらかじめご了承いただきたい。

それでは、以上の伊勢における食文化の特徴を踏まえたうえで、河崎を中心とした伊勢における庶民の食べ物について紹介していきたい。

(4) 伝統食の紹介

ここでは、河崎のまちに代表される伝統食、名物をわずかではあるが、紹介したい。

a) 伊勢うどん

柔らかく煮た極太の麺に、黒い濃厚なつゆ(タレ)をかけて食べる。具をあまり載せないのも特徴で、麺の茹で時間は、非常に長く、通常のうどんが 15 分程度であるのに対し、伊勢うどんは、1 時間弱ほど茹でる。少ないタレによく絡めるために長時間茹でて、柔らかい麺にしているそうだ。伊勢うどんの歴史は、江戸時代以前よりこの地の農民が、うどんに地味噌からできた「たまり」を少しかけて食べたのが初めだといわれている。たまり文化に代表される、伊勢河崎の伝統食である。

写真３　伊勢うどん
(『伊勢市観光協会』より引用)

b) さめのたれ

写真４　さめのたれ
(『伊勢志摩の旅よいとこせ』より引用)

「さめのたれ」または「さめんたれ」と言い、鮫の干物のことである。「たれ」とは「たり塩して干した肉」という意味であるとか、乾燥させるのに、つるしたので「垂れ」といったなど、語源は諸説あって不明である。サメを食べる習慣は、三重県では伊勢志摩地方だけである。古来より伊勢神宮の大きな祭典には欠かせない神饌の一つ、お供えものとして使われていた。伊勢神宮の神饌や饗膳には、古代や中世の食生活をしのばせるものが伝わっているが、それが民間の郷土食に直接影響を及ぼしていることは、ほとんどない。さめのたれは、その数少ない例であるといえる。

c) 絲印（いといん）煎餅

「河崎町播田屋」から 1905(明治 38)年に発売された。江戸時代末期に河崎で、参拝客をおもてなしする茶店として創業した、河崎における伝統的なお店による名物である。鶏卵入り小麦粉を薄く焼き上げたせんべいで、表面には**絲印**の印影を焼き付けてある。「**絲印**」は、室町時代以降、当時の中国から輸入された生糸に添付されていた銅印のことをいい、かつては受領証書にこの印を押して、取引の証とする習慣があった。

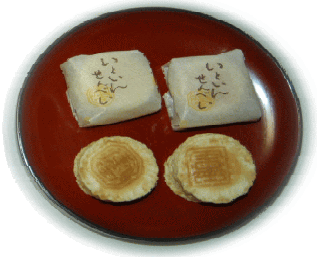


写真５　**絲印煎餅**
(『播田屋』 ホームページより引用)

d）二軒茶屋餅

二軒茶屋餅は、角屋の製造するきな粉餅である。角屋は、天正３(1575)年に、伊勢神宮へ参拝する舟参宮の港であった大湊から勢田川をさかのぼる船着場近くで創業された。創業当時、船着場付近には角屋と湊屋の二軒の茶屋があったことから、同地は二軒茶屋と呼ばれるようになったと伝えられる。伊勢で最も古い餅である。

写真６　二軒茶屋餅

（『伊勢商工会議所青年部』より引用）

e）伊勢はんぺい

写真７　伊勢はんぺい

（『若松屋』 ホームページより引用）

ぐち・イトヨリ・エソなどの白身魚を原料にすりあげたすり身に、伊勢芋を練りこんで作ったもの。かつて河崎には勢田川沿いに魚市場があり、伊勢志摩でとれたばかりの魚が数多く集まってきた。市場が賑わい、活気に満ちていた 1905(明治 38)年、「若松屋」は河崎で蒲鉾屋を始めた。冷凍技術がなかった時代、獲った魚を保存食にし、おいしく食べる方法として考え出されたのがかまぼこであり、この中で伊勢はんぺいは、河崎の名物となっている。

f）あいまぜ

「煮なます」とも称し、松坂地方を含めての郷土料理である。凍りこんにゃくを主材料とし、人参・牛蒡・椎茸・蓮根・ちくわ・青昆布などを一種類ずつ材料の持ち味をいかした味付けをし、最後に胡麻油で和えて押さえておく。仏事・会式・会食の料理の一品であった。

写真８　あいまぜ

（『郷土料理百選』より引用）

以上、まだまだ伊勢河崎における伝統食は数多くあるが、その中のごく一部を紹介させてもらった。次節では、これらの食に関わる、河崎における食文化のいまを考察してみる。

３．河崎における食文化のいま

２節でも述べたように、「伊勢の台所」と呼ばれ栄えた商人の町・河崎は現在、かつてのような食料供給地としての賑わいもなく、物資の拠り所ではなくなっており、もはや「台所」としての機能を果たしていないといえる。それでは、河崎では食文化に関するどのよ

うな変化が起き、今に至っているのか、またインタビューから実際に河崎に住む人々にとって、伝統がどのように残っているかを本節では考察したい。

(1) 流通手段の変化

第二次大戦後になり陸上輸送が急速に発達してくると、河崎でそれまで中心となっていた水上輸送が陸上輸送に取って代わられてしまい、陸上輸送に適さない河崎では多量の物資を供給することができなくなり、「物資の拠り所」という役割を果たせなくなった。

「伊勢の台所」としての機能を持続することができなかった河崎は、かつての賑わいも失われていくようになる。また、流通手段の変化によって、もともと河崎にあった魚市場や店が不便を感じて陸上輸送に適した地へ移転するなど、流出もあいつぎ、それがさらに河崎の「台所」としての機能を低下させたのだろう。

(2) 自然環境の変化

近代化が進むにつれ生活排水による水質汚染が広まり、勢田川が汚された。また、伊勢神宮の近くに位置し、本来汚染の少なかった河崎にまでその影響が及ぶようになったという。特に、伊勢地方では特産物となっている魚の収穫量も大きく減ったと言われている。

(3) 人々の意識の変化

河崎や、河崎を中心とした伊勢地方において、どのような伝統や伊勢河崎独自の食文化が今も残っているかを明確にすることはできなかったが、時代の流れとともに、それらの伝統や食文化が人々の意識の間においても変化し、新たに広まるもの、その存在を消さねばならなくなったものといった例は多くあるようである。

たとえば、河崎が栄えていた時期に大流行であった生姜糖は、第二次大戦後にチョコレートなど甘いものが簡単に手に入るようになってから消費が大幅に減り、現在は少数の店舗で扱われているものの、現代の若者にはあまり食されていない。時代の変化というのは、人々の嗜好の変化をもたらし、伝統的な食べ物の中で好まれなくなるものも多くある。

逆に、伊勢うどんといった伊勢の名物は、今日においてはスーパーやインターネット上などいろいろな店で扱われるようになり、さらに人気を博している。それは伝統食としての意識が人々に浸透しているためであるが、一方で、インスタントで食べられるような本物でない味が世の中に横行し、伝統の味が守られなくなっていると訴える方々もいる。伝統食を広めるのか、味を守るのか、そのバランスをとるのは非常に難しいことと思われた。

このように、時代の変化に伴って食文化においても変化がおとずれることが分かる。河崎はもう「伊勢の台所」と呼べない、とはじめに言ったが、あの賑わいを取り戻そうと、食の面から復興を行う人々が大勢いる。この復興策については、次節で述べる。

４．河崎における食文化の復興

(1) 伊勢河崎ブランド

ここでは、食文化の復興として「伊勢河崎ブランド」をとりあげてみる。伊勢河崎ブランドは、「伊勢河崎らしさが感じられるもの」と定義され、のり、こんぶ、伊勢茶、あおさなど、現在は 22 点が販売されている。これらは、伊勢河崎商人館内の商人蔵*で扱っているものの中から、伊勢河崎商人館・蔵人の会が、①伊勢河崎にゆかりがあるもの、②伊勢河崎の町並みに似合うもの、③人の手技が感じられるもの、の３点の認定基準で、伊勢河崎ブランドとして選定したものである。選定された商品を見てみると、観光客にお土産のような感覚で買ってもらえるよう、日持ちも良い海産物が多い。伊勢河崎ブランドを立ち上げたねらいとしては、観光客には河崎の魅力を知ってもらい、また地元の人々にも河崎の魅力を再発見してもらおうという意図があるそうだ。今後の展望として、伊勢河崎ブランドに携わっている方は、種類を増やし、ガイドブックに載せて広告するなどして、より多くの人々にこのブランドのことを知ってもらい、河崎の魅力をひろげようと努力している。

写真９　伊勢河崎ブランド商品
（「ローカルみえ」HP より引用）

*2006（平成 18）年より開設された商人蔵では、出展者から家賃をいただく代わりに一坪ショップを開くことができるという仕組みで、出展者が数々の商品を販売している。

(2) 伊勢のだいどこ市

次に、河崎の町のイベントの一つとして、だいどこ市を紹介する。だいどこ市とは河崎商人館が 2002（平成 14）年より毎月第四日曜に開いている朝市で、河崎商人館奥にて催されている。これらは主に、地元の方に河崎の良さや「伊勢の台所」とかつてそう呼ばれたころの賑わいを呼び戻そうという思いがあり、生もののため扱いづらく、河崎ブランドでは出せないような、地元ゆかりの食べ物を扱っている。地元 JA の協力で、新鮮な品が並び、先着 500 名には旬の素材を使ったオリジナルの汁物「商人鍋」がふるまわれる。月ごとに季節感あふれる内容のイベントも行われる。親子連れやお年寄りと、幅広い世代の方が参加・利用し、とても反響が良いようである。

写真 10　「伊勢のだいどこ市」風景
（『河崎商人館』より引用）

(3) インタビュー調査店舗の工夫

ここでは主に、インタビュー調査で得た内容を元に、河崎を代表する各店舗の工夫や取り組みを取り上げる。

a) 伝統食に対する意識

伊勢うどん屋は、1965(昭和 41)年当時には 130 軒あり、以前は組合組織でイベント会場での無料ピーアールなど伊勢うどんを広めていく取り組みを行っていたが、現在 50 軒ほどになり、お店の数も少ないので、あまり行えていない現状であるそうだ。しかし、「つたや」を経営する青木さんは、「伊勢うどんは伊勢にしかない文化なので、味の真似をしてもらってでも発展していってほしい」と考えて、たれの製法など、企業秘密をすべてオープンにしているそうだ。

b) 伝統文化の指導

「播田屋」は、創業当時から河崎の町中にお店をかまえており、地元のお客様もとても大事にしている。現代の嗜好に応じた商品開発のみならず、贈り物として商品を利用されるお客様に、熨斗紙の正しい付け方、用法などを教えている。熨斗（のし）とは、慶事における進物や贈答品に添える飾りのことで、現在では忘れられつつある伝統である。直接商品とは関係のないところからも、伝統の復興に対する工夫が窺えた。

c) 伝統文化を肌で感じる

「若松屋」では、人工的な保存料は使わず、新鮮で安心な商品を提供しており、インターネット上で伊勢はんぺいや他の商品の作り方を丁寧に紹介し、またネット上で商品の販売も行っており、全国のお客様に広く商品を提供する取り組みを行っている。また、小学生や観光客にかまぼこ作りの体験の場を提供し、実際に自分たちの手で、伝統の技術や味を楽しみながら体感できる。その他、魚の産卵や生育所でもあるアマモ場（海のゆりかご）の保全育成への協力や、タイやヒラメなどの稚魚放流などの活動を通して、子どもたちに海の環境問題に理解を深めてもらい、伊勢湾の現状と水産資源の重要性などについて考えてもらう「海づくりプロジェクト」という催しを企画している。伝統食についてだけではなく、その源となる環境資源に対しても、目を向ける取り組みといえよう。

写真 11　若松屋かまぼこ体験工房
（『若松屋』ホームページより引用）

(4)伊勢春慶

ここでは、食文化に関連して、日常的に食事の器として用いられた伊勢春慶という漆器をとりあげる。

a）伊勢春慶とは

伊勢春慶は、伊勢の特産品として大量に作られ、東海・近畿一円から関東や九州など広い地域にいきわたっていた漆器である。高価なものではなく、重箱、切りだめ、前、入れ子など日々の暮らしの中で使われた重宝な雑器であった。檜を素材とし、弁柄や食紅などで着色し、渋柿を発酵させて作った柿渋を重ね、最後に透明な春慶塗が施されているもので、綿繊維、おがくず、漆による「こくそ」という水漏れ防止も施されている。

写真 12　伊勢春慶
（2008 年 8 月 6 日；於・河崎商人館）

河崎では食品を中心とした荷を積み込んだ船が着き、その船が出て行くときに春慶の品などが積み込まれていったため、伊勢春慶が全国各地に広がったといわれる。

b）伊勢春慶の歴史

表 1　伊勢春慶の歴史

戦国時代初期～（1400 年代後半）	伊勢春慶の名はないが、伊勢での漆製品の生産が行われていたことがわかっている。
江戸時代～	漆器の需要が増大し、伊勢春慶が伊勢での漆製品の一つとして生産が始まっていた。
明治時代～	明治に入ってからは、国内産業の拡大充実が何よりも優先されたため、内国産業博覧会が何度も開かれ、そこへ伊勢春慶が出展されて褒賞を得たという記録が残っている。
明治 30 年代	伊勢春慶の需要が大きく拡大し、新たな業者が乱立した。

明治 35 年	山田漆器同業組合が組織され、盛んに製造された。
第二次世界大戦中	伊勢春慶の製造が禁止され、戦後も原料入手の困難で代用漆の「伊勢漆」が使われるようになると、新たな業者ができるなど、大きな変革が訪れた。
昭和 20 年代～ 30 年代	高度経済成長期を迎えて、大量のプラスチック製品に取って代わられた「伊勢春慶」は、衰退の一途をたどった。

（資料：伊勢人、『「伊勢春慶」歴史の流れ』より作成）

伊勢春慶の歴史を示した表 1 からも分かるように、伊勢春慶は明治時代をピークとして大量に生産されたが、高度経済成長期以降の需要は非常に減少していて、現在に至っても生産量は希少となっている。このままでは伊勢春慶の存続が危ぶまれるため、高齢化する技術者たちの後継ぎを見つけ出さないことには、伊勢春慶という重要な文化が失われてしまうであろう。

c) 伊勢春慶の復興

現在の伊勢春慶の状況を打開せねばと、河崎でまちづくりを進める人、伊勢春慶を今も大切に使っている人、かつて伊勢春慶を作った経験のある指物師や塗師、漆器の持つうるおいや温もりに興味を覚える人などが集まり、2004(平成 16)年 1 月、伊勢河崎商人館で「里帰り伊勢春慶展」を開催した。皇學館大学の学生や大学院生たちが伊勢春慶の歴史・民俗学的な調査研究を行い、豊富な実物資料や写真などとともに展示を行った。この「里帰り伊勢春慶展」において、現代の生活に伊勢春慶を活かすアイデアを提案したり、職人の実演などさまざまな催しも行ったところ、若い人たちを含む来場者から大きな反響を得た。

また、伊勢春慶を本格的に復活・再生しようと「里帰り伊勢春慶展」の実行委員会が母体となり、2004(平成 16)年 5 月に「伊勢春慶の会」が設立された。かつて栄えた「伊勢春慶」の復興を行い、新たな産業と雇用を創出し、伊勢地方の活性化につなげるという目的を持っている。

さらに、2008(平成 20)年 3 月には、伊勢河崎商人館の東隣に建つ、築 150 年の木造家屋を改築して伊勢春慶デザイン工房が開設された。ここでは、商品を展示販売するだけでなく、塗師の作業が公開され、塗体験がおこなえる。

以上のように、近年伊勢春慶はその名を全国に発信することで、伊勢全体の復興や伊勢地方の活性化につなげたり、地元の多くの人に伊勢春慶の良さを再発見してもらったり、技術の伝承の機会を広げるなど、その伝統を守るためにさまざまな活動を行っている。

５．まとめ

伊勢河崎は、かつて伊勢平野、志摩半島沖を背景とした、農産物、海産物の集産地であり、「伊勢の台所」と呼ばれていた。それは、河崎が環境に恵まれていることはもちろん、水運の発達や、伊勢神宮の門前町としての機能を持っていたことが要因であった。また、伊勢地方でのたまり文化や生なり文化といった独特の文化を背景に、「伊勢の台所」として河崎においても数々の伝統食や、郷土食が生まれた。しかし、現在は交通や流通の変化や、人々の嗜好の変化により、伝統食離れが起きている状況である。その状況を危惧した伝統食を扱う各店舗の人々による試みや、河崎の住民らによる「だいどこ市」、「伊勢河崎ブランド」などの伝統復興の動きが数多く見られた。

写真 13　伊勢河崎まちづくり衆・高橋理事長へのインタビュー風景(2008 年 8 月 8 日；於・河崎商人館)

河崎の食文化について、その特徴から、過去と現在との変化、さらには伝統の復興の取り組みと見てきたが、思っていた以上にまちづくりとも深く関わりを持っているように感じた。もとは豊かな食文化が育まれていた河崎において、食文化そのものや、それに関する人々の意識が薄れていくことは非常に残念で、惜しむべきものである。今後、まちづくりを通して、河崎の食文化を復興、存続させる運動がより推進され、また河崎の食文化の魅力をより多くの人に知ってもらえることを切に願う。

【参考文献・Web サイト】

・**農山漁村文化協会編集部(1987):『日本の食生活全集24　聞き書　三重の食事』**

・伊勢文化舎（2003):『伊勢人～伊勢春慶　ふるさとの漆器・再生への物語～』pp. 20-21

・三重県立図書館(2002):『三重県の食文化』
http://www.milai.pref.mie.jp/mie-lib/data/bungaku/no022/mie.html（2009/02/17 閲覧）

・ジオテック株式会社(2004):『三重県の地形・地盤』
http://www.jiban.co.jp/jibankaisetu/todohuken/mie/jiban_mie.htm（2009/02/19 閲覧）

・都市研究所スペーシア(2003):『伊勢河崎商人館を拠点とする ” 伊勢の台所 ” のまちづくり』
http://www.spacia.co.jp/Nagoya/arekore/isekawasaki/index.htm（2009/02/17 閲覧）

・いらかぐみ(2006):『伊勢河崎の町並み』

http://magok.cool.ne.jp/ise-kawasaki.html（2009/02/13 閲覧）
・NPO 法人伊勢河崎まちづくり衆　河崎商人館（2004）:『かわさきのまち』
http://www.e-net.or.jp/user/machisyu/machi.htm#003（2009/02/13 閲覧）
・河村謙吾（2008）:『地域を育む人と企業』
http://www.kokusaig.co.jp/0801/gg_kojiya/print.html（2009/02/13 閲覧）
・三重畿央新都推進協議会（2003）:『三重県が考える新都市像』
http://www.pref.mie.jp/KIKAKUK/HP/shuto/index.asp（2009/02/13 閲覧）
・伊勢春慶の会（2006）:『伊勢春慶とは』
http://www.ise-shunkei.com/index.html（2009/02/20 閲覧）
・　伊勢かまぼこの若松屋
http://item.rakuten.co.jp/wakamatsuya/c/0000000192/（2009/02/20 閲覧）
・　伊勢商工会議所青年部
http://www.iseyeg.jp/002seizou/nikechaya.htm　（2009/02/20 閲覧）
・　ローカルみえ
http://www.localmie.com/tougouban/2006/05.18/3.html　（2009/02/19 閲覧）
・絲印煎餅ホームページ
http://www.geocities.jp/haritaya/　（2009/02/19 閲覧）

＜ 編 集 後 記 ＞

○今回私が調査したテーマは「食文化」ということで抽象的な部分が多かったため、インタビューでは具体的な質問ができず、協力してくださった方々には大変な迷惑をかけたことと思います。にもかかわらず、どの方も楽しくお話をしていただき、また細かな事まで教えていただけて、本当に感謝しています。また、現地調査を通して、「食文化」というテーマから工芸品やまちづくりまで、様々な面にも触れることができたのはとても楽しかったですし、非常に良い経験になりました。この実習体験を今後にも活かしたいと思います。（石田　萌）

○初めての調査実習で分からないことも多く、調査段階での準備不足などもあり大変でした。しかし、今回の実習を通して河崎の町というものを深く知ることができ、インタビューなどを通して、資料だけでは分からない住民の人の意識や気持ちを知ることが出来ました。今回の調査実習でまとめたものは不十分なところも多いと思いますが、今後のまちづくりに少しでも役立ってくれたらいいと思います。（権田 裕士）

○この実習を行うまでは、伊勢といえば伊勢神宮を中心とした宇治山田のイメージしかなかったのだが、この河崎の地域を調査して伊勢地方の奥深さを知ることが出来た。また、聞き取り調査として何人かの方にインタビューさせていただいたが、このような実習を行わなければ得られない貴重な体験だったと思う。この経験を今後に活かしていきたい。（酒井 宇紀）

○今回初めて調査実習を経験しましたが、インタビューのやり方やまとめることの難しさなどが分かりました。調べたことをまとめるという難しさだけでなく、調べたいことをまとめる難しさもあるのだなと思いました。河崎ではいろいろな方にインタビューさせてもらい、貴重な話も聞けたのですが、レポートにうまくまとめきることができなかったように思います。でも、現地に赴いての実習という経験ができたことはこれからに生かせるのではないかと思います。最後に、河崎でお世話になった皆様ありがとうございました。（迫田　和佳子）

○今回は初めての調査実習だったこともあり、準備の段階で実際の調査がどのようなものになるのか全く想像ができず、それゆえ調査項目も曖昧なままでした。そのため、調査でなんとなく得られた結果をなんとなくまとめた報告書になってしまいました。きちんと調べたいことを調べることが大切だと分かったと同時に、またその難しさも実感した気がします。（中山 和哉）

○私は今回初めてインタビュー調査を行うことを経験しましたが、感想としてとても難しいことだなと思いました。簡単そうに見えて、初対面の方と会話すること難しさ、聞きたい点を的確に質問することの難しさなど、身をもって体感しました。でも、回数を重ねるごとに少しずつ慣れてくるのがわかり、そしてインタビューを受けてくれた方がとても快く、楽しく、お話していただいたおかげで、緊張しすぎないで、出来るようになりました。今回、お忙しいお時間を割いていただき、我々のインタビューを受けていただいた方々、改めて有難うございました。この河崎調査で得た経験を、今後の勉強、研究に活かしていきたいと思います。（米倉　数昌）

伊勢河崎まちづくり衆の皆さんと野外調査実習参加者一同
（2008 年 8 月 9 日、伊勢河崎商人館中庭にて撮影）

伊勢 河崎

－2008 年度 地理学野外調査実習 報告書－

発行日　2009 年 3 月 27 日
編　集　大場 茂明（大阪市立大学大学院 文学研究科 教授）
大阪市立大学文学部 地理学教室
〒 558-8585　大阪市住吉区杉本 3-3-138
TEL 06-6605-2402 / FAX 06-6605-2357
E-mail oba@lit.osaka-cu.ac.jp